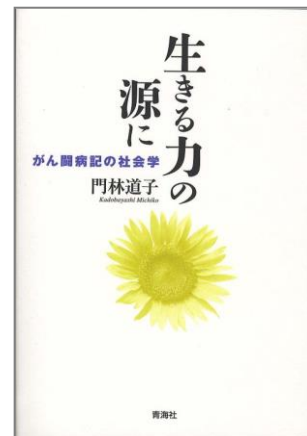


● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

生きる力の源に —がん闘病記の社会学—
門林道子著 青海社 2011年10月初版



はじめに

1997年、著者は、御主人様を膵臓がんで亡くされた。中学、高校、浪人生の3児の母親であった。御主人様が加療中、ある闘病記に会う。その本に、「苦しいのは私たちだけではない」と励まされ、助けられ、支えられた。

1998年、日本女子大学大学院人間社会研究科に戻られ、闘病記の研究を始められ、1999年、題名が「現代社会における闘病記—働き盛りのがん死を通して」である修士論文にまとめられた。以降、一貫して、闘病記の社会学的研究を続けられている。

博士論文、「闘病記の社会学的研究—がん闘病記を中心に」（2010年3月）、を書籍化されたのが、この一冊である。300頁にも及ぶ。

本書の内容は、大きく2つに分けることができる。1つは、1964年から2009年までに出版された約550冊の闘病記を用いた研究で、2番目は、著者が実際に行っている3つのフィールドワークである。その3つとは、闘病記の著者等へのインタビュー、カウンセリング等のナラティブセラピーの調査、そして、著者が2001年から始めた、闘病記を用いた看護学校等での講義である。

今回は、1番目の、「がん闘病記の研究」に焦点を絞って紹介する。

著者の紹介；門林道子（かどばやしみちこ）

1955年生まれ。博士(学術)。現在、日本女子大学人間社会学部学術研究員。昭和薬科大学、了徳寺大学、川崎市立看護短期大学非常勤講師。日本死の臨床研究会、城南緩和ケア研究会、日本赤十字社医療センター緩和ケア研究会世話人。

本書の内容・感想

本書でも指摘されているように、乳がんなどは、転移後もある期間生きられるようになり、2000年前後から、がんと「闘う」という考え方から、「共生する」「共存する」本が増えた。よって、がん患者さんやご家族様が書かれた本をすべて、「闘病記」と呼ぶことに違和感を抱かれる人もおられるだろう。私もそうだが、しかし、まだ良い呼称がない。よって、著者は、「闘病記」を「病気と闘う(向き合う)プロセスが書かれた手記」と定義している(学術論文だから、内容も硬い)。

がん闘病記の変遷は、「告知」と深く関わっているという。著者は、4期に分けている。

本人に本当のことを言わないのが当たり前とされた1980年頃までをⅠ期、告知が登場した1980年代後半以降をⅡ期、告知率が高まった1990年半ば以降をⅢ期、告知が一般化され、告知の代わりに、インフォームド・コンセントが使われるようになった2000年前後からをⅣ期としている。

Ⅰ期では、患者さんは猜疑心を抱き、内容も暗く、悲愴感が漂う。Ⅱ期は、告知された時がん患者さんが受ける衝撃、家族の苦悩が描かれている。Ⅲ期は、患者さんも情報を求めるようになり、すべてを知って闘う内容になっている。先駆者は、国際ジャーナリスト、「乳がんなんかには負けれない」等の著書のある、千葉敦子さんだ。他方、「尊敬はするがとても千葉さんのように強くは生きられない」という声も生まれてくる。Ⅳ期では、がんと「共生」「共存」意識を明確にし、治る見込みはないと自らの病状をある程度正確に理解した上で、絶望的になるのではなく、残された生命を大切に一日一日を主体的に生きる姿が描かれる書籍が

主流となった。これはホスピス緩和ケアの理念にも繋がっていると分析している。

著書はここから、「社会の流れが闘病記の内容を変え、闘病記の内容が社会を変えた。個人と社会との間で双方向的な相互作用が行われている。そこに闘病記の意義がある。」と導いている。

ところで、「現代における闘病記の意義は？」。

IV期における、闘病記を書く行為を、「受動的能動性」という概念を用いて論じている。

病いや障害は偶発的に起こる。しかも、医療専門職によって治療され、看護され、家族や知人によって世話されることから、「受動的な存在」にならざるを得ない。他方、告知が一般化し、がんと対峙し、治療法、その後の生き方を自己選択していく現代社会では、闘病記を書くことは、自分の状況を受容しつつ、多くのことを再構築し、生きる力の源になる。「受け入れつつ、能動的に書く」ことより、「頭の中が整理できる」「すっきりする」「一歩前に進むことができる」ようになる。闘病記を書くことは、「受動的能動性」行為なのだ。また、自分と同じ病気の、同じ立場の患者さん、ご家族の闘病記を読むということも、「受動的能動性」行為に繋がる。その意味で、書く側、読む側両者にとって、がん闘病記は、『生きる力の源』といえる。

海外では、闘病記のような手記は、**True story, Cancer patient's biography** の範疇に含まれるが、日本ほど多くない。著者が検索した限り、闘病記にどのような社会的意義があるのか、闘病記を多面的に考察した研究は、社会学の分野に限らず、どの分野においてもほとんどなかったようだ。本書は、学問的に闘病記を俯瞰的に捉えた、世界で最初の論文と言えるのであろう。

今後益々、医療従事者には、患者様との隙間を埋めることが求められると予測される。その手段の一つが、闘病記を患者様と同じ目線で読むことではなかろうか。そのための入門書として、本書を薦める。多くの医療従事者、特に、がん医療に携わる医師に読んでいただきたい。ただし、いつも 10 枚前後の論文しか読んだり書いたりしない医師にとっては、307 頁の本書を読破することは難しいかもしれないが、そこはなんとかして読んでいただきたい。患者様のためにも、より良い医療の実現のためにも。

理事 井上 林太郎